２．わいわい子ども食堂

記録：川野優月

場　　所：北医療生協 すまいるハートビル２階ワイワイルーム
（名古屋市北区上飯田北町 1-2-2）
対　　象：幼児～高校生（付き添いの大人）、高齢者
参　加　費：子ども 200 円、大人 300 円
代　表　者：杉崎 伊津子さん
構成団体：北医療生活協同組合、社会福祉法人　名北福祉会、
暮らしと法律を結ぶホウネット
初　　回：2015 年 11 月 4 日（水）17：00～19：00　毎月第 1 水曜日

参加日時①：8 月 3 日（水）17：00～　（ボランティア　15：00～）
参加人数：40 人以上
献　　立：冷やし中華、からあげ、果物
参　加　者：井上実、川野優月

参加日時②：10 月 5 日（水）17：00～　（ボランティア　15：00～）
参加人数：80 人（子ども、大人合わせて）
献　　立：いもごはん、味噌汁、筑前煮、果物
参　加　者：井上実、川野優月、成元哲

参加日時③：11 月 2 日（水）17：00～　（ボランティア　15：00～）
参加人数：85 人（子ども 46、大学生 4、取材 2、見学 10、スタッフ 23）
献　　立：マーボーご飯、ナムル、中華スープ
参　加　者：小瀧一誠、星大輝

インタビュー日時：10 月 14 日（金）14：00～
インタビュー者：井上実、川野優月、水野桃弓、山田美緒、成元哲

◎きっかけ
子どもの貧困が 6 人に 1 人にのぼり、シングル家庭の増加などにより 1 人で食事をとる子、コンビニ弁当で食事を済ます子、朝食を食べない子など、子ども達が家庭で十分な食事をとることができないという状況を知った。また、夏休みに給食がない為、2～3kg 痩せてしまう子や、親が食事の用意をしないで仕事に出かけてしまう子がいるということを知り、子どもが気軽に入れる食堂を開き、サポートしていきたいと思い、開催を決めた。貧困が問題視されているからブームでやっているのではなく、誰もが居心地の良い居場所を提供したかったから子ども食堂を開設しようと考えた。

◎お店
構成団体の 1 つである北医療生活協同組合の場所を無料で利用している。場所は広く、たくさんの人が来てもスペースに余裕がある。ご飯が出来るまでの間は、本の読み聞かせや折り紙などを行っている。食後は、走り回って遊んだり、イベント団体の人が訪れ、子どもたちを楽しませたりしている。イベント団体の人は依頼しているのではなく「子どもたちに体験してほしい」という思いで来てくれている。ほとんどの子どもたちが食べ終わっても帰らず、子ども食堂が終わる時間まで遊んでいる。

◎ボランティア
構成団体の 3 団体から職員がそれぞれ 2 人以上参加している。これらはすべてボランティアであり、3 団体とも財政は何もない。ボランティアは登録制をとっておらず、参加したいと言えばだれでも参加できる。ボランティアの募集や手伝ってほしいと促したことはないにもかかわらず、たくさんの人がボランティアとして参加してくれている。中学生、高校生のボランティアも増えてきており、大人のサポートをするほかに、子どもと一緒に食事をしたり遊んだりしている。

◎資金
金銭的な援助は、北社会福祉協議会から開設資金 5 万円、コープあいち福祉基金の助成金 10 万円のみ。コープあいちの助成金は運営費に使えないため道具の購入に利用している。また、来店者の大人がカンパで寄付してくれることや、定期的に寄付をしたいから送金用紙がほしいと電話をしてくる方、匿名での寄付などもある。子ども食堂では利用できないものを寄付されたときは、バザーなどで売って資金にしている。来年度はキリン福祉財団（年間 30 万円までもらえる）の助成金を検討している。柔軟な感じで申し込みがしやすそうだが、推薦者が必要である。

◎食材、メニュー
テレビや新聞などから子ども食堂の存在を知り、寄付がしたいと連絡をくれる方が多く、たくさんの方が協力してくれている。お米も寄付してもらい、まだ一度も買ったことがなく、山ほどある。ユーハイム（全国メーカー）さんからバームクーヘンのカンパや、おてらおやつクラブ（お寺のお供え物を子ども食堂などの施設に提供している団体で一人親家庭と子ども食堂などの慈善団体をつなぐ架け橋のような役割を目的とし、双方の支援を行っている）からお菓子の寄付がある。お菓子の寄付は子どもたちにも人気でありがたい。

◎来店者
子どもだけで来ている子が多く、子ども食堂が終わる時間に親が迎えにきている人が多かった。貧困の方に来てほしい思いもあるが、貧しい人が集まる場所だと認識されるといじめにつながる原因にもなるため、貧困対策は強調せず、誰でも食堂と謳っている。子どもの居場所、サロンのような役割を意識している。一人親家庭の子や、見た目で訳ありだと分かる子どもなどが来てくれたこともあり、そういう子どもたちを受けとめていけるようになりたいと思った。見た目で訳ありだと分かる子どもには地域の人に声をかけ、気にかけてもら

うようにしている。

◎宣伝
主に Facebook とチラシを利用している。食材や資金などの寄付は、テレビや新聞の取材、Facebook を見た人からが多い。子どもたちに子ども食堂の開催をお知らせするときはチラシを利用している。北区にある小学校の門前でチラシ配布、団地へのポスティング、機関紙への掲載、学童保育所への配布などを行っている。小学校の門前でのチラシ配布は、一斉下校の日や防災訓練などの親子で帰る日に配るようにしている。

◎課題、悩み
子どもの料金を無料にしたいとも考えているが、安定的な資金の確保ができていないため困難である。
子ども食堂を 1 年近く続けていくうちに来てくれる子どもの数も増えてきたが、この中にどれだけ貧困家庭の子どもがいるのかわからないため、本当に届けたい子に届いていないのではないかという思いがある。学校は貧困家庭の子どもを把握しているはずなので、学校の中やトワイライトにチラシ配布をしたいがさせてもらえない。学校と連携し、お互い情報を共有しあうことでもっと子どもたちが安心して健やかに生活できるようになると思っている。

◎感想
わいわい子ども食堂は他の子ども食堂に比べると参加者が多く、イベント団体の人も来ていて賑やかな雰囲気で行われていた。最近は子どもだけで 50 人近くの参加者がいるが、参加者を募れば募るほど本当に貧困で子ども食堂を求めている人達に届きにくいのではないか、と思った。地域に根付いており、受け口が広いからこそ、寄付やボランティアなどが増える利点もあるが、貧困家庭の子どもは来にくい状況になっているのではないか、と気になった。多くの子どもが参加するため、一人一人とコミュニケーションをとることが難しいと感じた。子ども食堂の数が増えれば子どもの数も分散され、子ども一人一人と積極的にコミュニケーションがとれるので子ども食堂の数が増えていけばいいなと思った。

◎写真